平成24～25年度厚生労働科学研究費補助金（地域医療基盤開発推進研究事業）

分担研究報告書

　看護師特定能力養成調査試行事業対象看護師（2年課程修了者）の

実践能力向上のための研修プログラムの開発

～養成事業修了看護師（2年課程）を対象にした卒後研修（off-JT）の評価

および卒後研修に関するニーズ調査～

研究協力者　山田　巧（東京医療保健大学東が丘看護学部　准教授）  
研究協力者　岩本郁子（東京医療保健大学東が丘看護学部　講　師）

研究協力者　石川倫子（金沢医療センター附属金沢看護学校教育主事）

研究協力者　山西文子（東京医療保健大学東が丘看護学部　教　授）

研究協力者　草間朋子（東京医療保健大学東が丘看護学部研究科長）

**研究要旨**：看護師特定能力養成　調査試行事業2年課程修了者（以下、養成事業修了看護師）の実践能力向上のための研修プログラムの開発を目指し、養成課程修了生を対象に企画実施した卒後研修の評価及び卒後研修のニーズについて調査することを目的とした。平成24年度は、平成24年3月に養成課程（大学院修士課程）を修了した20名の養成事業修了看護師に対し卒後研修に関するニーズを調査した。その結果、卒後研修の開始時期としては、養成課程修了後1年目の10～12月を希望しており、卒後研修の頻度としては1年に1回の開催を希望していた。希望する研修内容で最も多かったものは「医師による超音波、Ｘ線等の画像診断に関する知識と技術」、次いで「頻度の高い症状に対する医師による診断から治療までの系統的な知識」であった。修了後2年目に希望する研修内容で最も多かった研修内容は「頻度の高い症状に対する医師による診断から治療までの系統的な知識」、次いで「医師による超音波、Ｘ線等の画像診断に関する知識と技術」であった。平成25年度は、23年度　特定看護師（仮称）業務試行事業及び24年度の看護師特定行為　業務試行事業で対象看護師であった者を対象とし、新たに創設される「特定行為に係る看護師の研修制度（案）」における特定行為区分のうち、養成事業修了看護師の学習ニーズの高い「薬剤投与関連」に関する研修（off-JT）を企画・開催し、受講生の研修に対する有用性、難易度、満足度について評価すること、また、医行為実施に必要な知識や技術獲得のための研修（off-JT）ニーズについて調査した。その結果、「薬剤投与関連」に関する養成事業修了看護師の知識の獲得状況について評価したところ、抗菌薬や肺炎といった感染症に用いられる薬剤、循環器系疾患領域の抗凝固療法や高血圧に関する薬剤の理解度が困難であるという回答であった。しかし、内容としては有用であり満足するものであったと回答していた。医行為実施に必要な知識や技術獲得のための研修（off-JT）ニーズについては、「アセスメント」、「病態機能学」、「臨床薬理学」、「マネジメント」に関するニーズが高く、一方、「疾病予防」、「医療倫理」、「NP論」、「ＮＰ実践に関連する法令」、「医療安全」についてのニーズは低かった。研修形式のニーズについては、土・日曜日開催を希望しており、シリーズ化した複数回に及ぶ研修の場合は1か月程度の間隔を空けて研修日を設けることを希望していた。また、平成24年度の調査では年1回程度の研修を希望していたが、今回の調査では年間2回程度の研修を希望していた。研修参加に係る費用は自費が多いく、一部の受講者は出張扱いで週休振替の措置を受けていた。

1. **研究目的**

23年度「看護師特定能力養成調査試行事業」の指定を受けた養成課程（大学院修士課程）の修了者（以下、養成事業修了看護師）が臨床現場に出て活動を開始してから2年が経過した。養成事業修了看護師は所属している施設により研修体制には差はあるものの、医師の初期臨床研修のように各診療科をローテーションしながら特定の高度な臨床実践能力を必要とする行為を確実に実施できるようにする上で必要とされる医学的な知識や技術を修得するためのOJT研修を取り入れている（藤内,2010）。しかし、施設間で指導体制にばらつきがあり（石川,2013：島田,2013）、養成事業修了看護師の臨床実践能力の質の担保とさらなる質の向上を目指した卒後の継続研修の充実が不可欠であり（草間,2013）、卒後研修プログラムの構築が喫緊の課題である。

クリティカル領域における養成事業修了看護師の養成課程修了1年目のOn the jobトレーニングによる各施設の研修を補完する研修、および養成事業修了看護師としての実践力を維持・向上する研修を位置づけることが必要である。そこで、平成24年度は一定期間、外部機関で行うクリティカル領域における養成事業修了看護師の卒後研修プログラムを開発するために、クリティカル領域の修了生を対象とした研修に関するニーズ調査を目的とした。  
　平成25年度は、23年度「特定看護師（仮称）養成　調査試行事業」及び24年度「看護師特定能力養成　調査試行事業」の指定を受けた養成課程（大学院修士課程）の修了者を対象とし、「臨床薬理学講座」研修に参加した養成事業修了看護師を対象に研修の有用性、難易度、満足度についての評価すること、および、今後、養成事業修了看護師として活動していく上で、卒後研修（off-JT）として希望する研修内容および研修形式等について調査することを目的とした。

1. **研究方法**

Ⅰ．平成24年度

１．対象者

　医療施設においてクリティカル領域で働く養成事業修了看護師で同意の得られた20名

２．調査期間

　平成24年9月24日～10月12日（養成課程修了後6か月経過時点）

３．調査方法

　無記名の自記式質問紙法による郵送調査を行った。なお返信をもって同意を得ることとした。調査内容は①研修開始時期、②研修の頻度、③修了後1～2年目の研修内容・方法、④参加可能な研修期間、⑤修了後3年目の研修希望等とした。

　研修内容については修了生の意見および修了後の到達状況から14項目を抽出した。　　　　①頻度の高い症状における医師による診断から治療までの系統的な知識、②医師による超音波、X線等の画像診断に関する知識と技術、③臨床推論を支える確かな最新の情報、④臨床推論の妥当性、⑤臨床で活用できる薬理学の知識、⑥周手術期医療に関連した新しい治療法やケアに関する知識と技術、⑦救急医療に関連した新しい治療法やケアに関する知識と技術、⑧集中治療に関連した新しい治療法やケアに関する知識と技術、⑨治療選択の妥当性、⑩高度な臨床実践能力を必要とする行為に対する最新の技術情報と技術修得、⑪頻度の高い臨床問題（胸痛、血圧低下、意識障害など）に対するアプローチのシミュレーターを用いた学習、⑫医師や他職種、同僚である看護師との関係形成、⑬医学的な知識と看護の専門的知識を活用してのケアの工夫、⑭養成事業修了看護師としての活動と役割についてのディスカッションとした。

　項目ごとに「必ず行ってほしい」「時間があれば行ってほしい」「どちらでもよい」「行わなくてもよい」の4段階のリカート尺度で回答を求めた。さらに、その上で「必ず行ってほしい」と回答した中から、特に研修を実施してほしい項目を3つ選択し、順位をつけてもらった。

４．分析方法

　対象者の属性および研修に関する質問は、単純集計を行い分析した。

　研修内容については、「必ず行ってほしい」と回答した中から、特に研修を実施してほしい項目を3つ選択し、順位をつけた。その順位を、1位を5点、2位を4点、3位を3点と得点化し、集計した。自由記述については内容分析を行った。

Ⅱ．平成25年度

１．対象者：23年度特定看護師（仮称）養成　調査試行事業及び24年度看護師特定能力養成　調査試行事業修了者（2年課程）のうち、平成「25年度臨床薬理学講座」に参加した45名

２．調査日：平成25年8月4日

３．データ収集方法：対象者に自記式質問紙を受講直後に配布し、回答してもらい回収。

Ⅲ．倫理的配慮

　研究参加は自由意思であり、参加者の同意を得て実施した。秘密を厳守し、不利益や個人を特定することはないこと、試資料の保管や試資料の処分は厳重に行い、公表時の配慮や研究外の使用はしないことを文書にて説明した。東京医療保健大学の研究倫理・安全委員会の承認を得て実施した。

1. **研究結果**

Ⅰ．平成24年度調査

１．対象者の背景

１）所属している医療機関について

　養成事業修了看護師として所属している医療機関は国立病院機構が20名中13名（65％）、公的医療機関が6名(30%)、医療法人が1名（5％）であった。病床数は1000床以上が2名（10％）、700床以上が8名(40％)、500床以上が3名(15％)であり、500床以上に所属している者が半数以上であった。

２）看護経験について

　看護経験年数は11.3±4.9年であり、主に救命救急センター、周手術期患者の入院する病棟での経験であった。

３）厚生労働省　平成24年度看護師特定行為・業務試行事業の指定の有無

　厚生労働省　平成24年度看護師特定行為・業務試行事業の指定の有無については「指定を受けている」が16名（80%）、「申請中」が3名（15％）、「申請書を未提出」が1名（5％）であった。

４）養成課程修了後1年間の研修体制について

　養成課程修了後1年間の研修期間における診療科のローテーションの有無については有りが15名(75%)、無しが5名(25%)であった。診療科のローテーション内容と期間は、「救命センター・総合内科(内科系)・外科を各4ケ月」が5名(25％)、「内科系（総合内科・循環器内科など）、外科系（外科・救命センターなど）を各6ヶ月」が2名(10%)、「総合内科を6ヶ月、救命センター・外科を6ケ月」が2名(10%)であり、主に救命センター、総合内科、外科で研修をしていた。

２．卒後研修についての希望

１）卒後研修の開始時期

研修の実施時期に関する希望は、修了後1年目の10～12月が11名(55％)であった。2年目以降に開始時期を希望した者は7名(35%)であった。

２）卒後研修の開催頻度

研修の開催頻度に関しては、1年に1回が11名(55％)、1年に2回が7名(35％)であった。

３）養成課程修了後1年目に希望する研修内容

　最も希望の多かった研修内容は「医師による超音波、X線等の画像診断に関する知識と技術」で52点であり、次に多かったのは「頻度の高い症状における医師による診断から治療までの系統的な知識」で48点であった。次いで「臨床で活用できる薬理学の知識」31点、「臨床推論を支える確かな最新の情報」26点、「救急医療に関連した新しい治療法やケアに関する知識と技術」「治療選択の妥当性」がいずれも25点であった。

　その他に希望する研修内容では、保険診療4名、微生物や感染症学3名、養成事業修了看護師としての倫理1名、画像評価（CT、Ｘ線、超音波など）の講義をぜひ行ってほしい2名であった。

４）養成課程修了後1年目に希望する研修方法

　研修方法では、「自分の能力を強化できる診療科で研修を行う」を「必ず行ってほしい」と希望した者が多く、7名(35％)であった。「時間があれば行ってほしい」は4名(20％）で計11名(55％)が希望をしていた。「講義」は「時間があれば行ってほしい」が9名(45％)、「必ず行ってほしい」が5名(25％)であり、計14名が希望していた。まずは知識の足りなさを補う講義を行ってほしいと希望していることがうかがえた。

　「技術演習」「シミュレーショントレーニング」については、いずれも「行わなくてもよい」6名(30％)、「どちらでもよい」6名(30％)であった。

その他の研修方法では、「生理検査室や放射線科（画像読影室）での研修」1名、「経験症例ベースでリアルな学習」が1名であった。

５）養成課程修了後2年目に希望する研修内容

　最も希望の多かった研修内容は「頻度の高い症状における医師による診断から治療までの系統的な知識」で38点であり、次に多かったのは「医師による超音波、X線等の画像診断に関する知識と技術」で36点であった。次いで「臨床で活用できる薬理学の知識」「臨床推論を支える確かな最新の情報」がいずれも28点、「臨床推論の妥当性」「救急医療に関連した新しい治療法やケアに関する知識と技術」がいずれも27点、「治療選択の妥当性」が26点であった。その他に希望する研修内容は、抗菌薬の選択1名であった。

６）養成課程修了後2年目に希望する研修方法

　研修方法では修了後1年目と同様に、「自分の能力を強化できる診療科で研修を行う」を「必ず行ってほしい」と希望した者が多く、7名(36.8％)であった。「時間があれば行ってほしい」も3名(15.7％）で計10名(52.6％)が希望をしていた。「講義」は「時間があれば行ってほしい」が9名(47.3%)、「必ず行ってほしい」が5名(26.3％)であり、計14名(73.7%）がまずは知識の足りなさを補う講義を希望していた。

　「技術演習」については、「行わなくてもよい｣5名(26.3％)、「どちらでもよい｣6名(31.6％）であった。「シミュレーショントレーニング」については「行わなくてもよい」5名(26.3％)、「どちらでもよい」8名(42.1％)であった。2年目のことは想像がつかないと回答した者が1名いた。

７）養成課程修了後1～2年目に希望する研修プログラム

　修了後1年目では「決められたプログラムでよい」が13名(65％)、修了後2年目では「選択できる複数の個別プログラムを組んでほしい」が10名（50％）であった。

８）養成課程修了後1～2年目の参加可能な研修期間

　修了後1年目の参加可能な研修期間は「1週間以内」が12名(60％)、「2週間」が3名(15％）であった。修了後2年目の参加可能な研修期間は「1週間以内」が10名(50%)、「2週間」が3名(15％)であった。その他は2年目の働き方が決まっていないのでわからないが5名であった。

９）養成課程修了後3年目に希望する研修

　3年目の研修希望は、＜自分の能力を強化できる研修＞4名で、具体的な記述は「自分の能力に合わせて必要な研修を選択できるシステム」「3年目は基本的な基礎の研修が終了しているので、個別性を重視した研修」「施設によって行っている研修もそれぞれ異なっているので個別のプログラム」であった。＜養成事業修了看護師の活動を行う上での最新の知識の獲得＞3名で、具体的な記述は「この立場は看護師での研修より常に最新の医療情報や治療の進め方、ガイドライン等にアンテナをはっていなければならない」「常に新しい知見は確認しておきたい、今以上に知識が必要である」「年に1回でも病院業務から離れ学習に専念する機会があってもよい」であった。

　その他に「希望者のみもしくは地域ごとに近くの開催地であると参加しやすい」「3年目であれば教える立場にもなるので、教育などに関連した研修があってもよい」「他病院での長期研修」「共通認識をもつための集合教育は必要」「業務優先となるので参加が難しい」などの意見があった。また「現段階ではイメージが付かない」が5名であった。

10）研修全体に関する希望

　研修全体に関する希望では、「施設ごとに役割や立ち位置が異なる中で、足並みをそろえて研修できるのだろうかとイメージができない｡」「統一したプロトコールを作成し、それをもとに活動してから研修を受けた方が、同じ研修を受けるにあたってはよいのではないかと考える」「長期間行うとすれば、専門診療科の院外研修を希望する」などであった。

Ⅱ．平成25年度調査

１．「臨床薬理学講座」研修に対する養成事業修了看護師の評価に関する調査

１）質問紙への回答者：「臨床薬理学講座」は4日に分けて実施された。質問紙に回答した養成事業修了看護師は、最終日である4日目の参加者45名のうち、23年度養成事業修了看護師18名、24年度養成事業修了看護師22名の合計40名（回収率89%）であった。   
２）「臨床薬理学講座」は表１に示す16のカテゴリーの内容で構成されている。各カテゴリーの教育内容について、有用性、満足度、難易度の3つの項目に関して評価を得た。各項目とも1～5のリカート尺度で回答を得た。有用性については、1(全く役に立たない）・2（あまり役に立たない）・3（どちらとも言えない）・4（役に立つ）・5（非常に役に立つ）、満足度については1(全く満足していない）・2（あまり満足していない）・3（どちらとも言えない）・4（満足している）・5（非常に満足している）、難易度については1(全く難しくない）・2（あまり難しくない）・3（どちらとも言えない）・4（難しい）・5（非常に難しい）とし、各尺度を点数化し評価結果とした。有用性および満足度に関しては点数が高いほど効果が高かったことを示し、難易度に関しては、点数が高いほど理解が困難であることを示す。

（１）有用性   
　　「臨床薬理学講座」の16カテゴリーの教育内容の有効性についての評価結果（数値は平均得点）は、①抗菌薬4.42、②高血圧4.32、③心筋梗塞・脂質異常症4.25、④抗凝固薬・抗血小板薬4.23、④輸液電解質・栄養4.23、⑥肺炎4.19、⑦喘息・COPD3.98、⑧薬物動態・相互作用3.91、⑨悪心嘔吐・便秘下痢3.84、⑩不眠症・せん妄3.67、⑪ステロイド外用3.58、⑫処方の基礎3.47、⑬てんかん3.44、⑭疼痛3.32、⑮糖尿病3.23、⑯心不全・不整脈2.78であった。  
  
（２）満足度  
　「臨床薬理学講座」の16カテゴリーの教育内容の満足度についての評価結果（数値は平均得点）は、①抗菌薬4.22、②心筋梗塞・脂質異常症4.14、③高血圧4.07、④抗凝固薬・抗血小板薬3.38、④肺炎3.38、⑥喘息・COPD3.67、⑦薬物動態・相互作用3.63、⑧輸液電解質・栄養3.60、⑨ステロイド外用3.51、⑩悪心嘔吐・便秘下痢3.36、⑪処方の基礎3.33、⑫不眠症・せん妄3.31、⑬てんかん3.07、⑭疼痛2.84、⑮糖尿病2.80、⑯心不全・不整脈2.10であった。  
  
（３）難易度  
　「臨床薬理学講座」の16カテゴリーの教育内容の難易度についての評価結果（数値は平均得点）は、①抗菌薬3.36、②肺炎3.26、③薬物動態・相互作用3.26、④抗凝固薬・抗血小板薬3.20、⑤高血圧3.18、⑥てんかん3.11、⑦喘息・COPD3.11、⑧不眠症・せん妄3.07、⑨心筋梗塞・脂質異常症3.07、⑩ステロイド外用2.89、⑪疼痛2.82、⑫悪心嘔吐・便秘下痢2.80、⑬輸液電解質・栄養2.77、⑭処方の基礎2.65、⑮糖尿病2.55、⑯心不全・不整脈2.30であった。

表１：「臨床薬理学講座」研修の評価結果



２．卒後研修（off-JT）に関するニーズ調査（表２）  
１）必要と思われる研修項目  
　日本NP協議会作成による「ＮＰ資格認定試験の出題科目」（日本NP協議会,2013）を参考に、9個のカテゴリー、66個の大項目（「NP論：大項目5個」「疾病予防：大項目4個」「医療倫理：大項目1個」「医療安全：大項目1個」「病態機能学：大項目2個」「臨床薬理学：大項目6個」「アセスメント：大項目3個」「マネジメント：大項目28個」「ＮＰ実践に関連する法令：大項目16個」）について、研修ニーズを把握するための質問紙を作成し、対象者には卒後研修を希望する研修項目を3つ選択してもらった。その結果を表2に示す。％は40名の対象者のうちでそれぞれの項目を研修希望項目として選択した人数の割合を示す。

表２：今後希望する研修（off-JT）



最も研修ニーズが多かった項目は、「医師による診断に必要な臨床検査」32名（80%）であり、「治療・処置の基本」29名（73%）、「フィジカルアセスメント」28名(70%)、「初期救急患者のマネジメント」27名(68%)、「輸液・輸血、血液浄化」25名(63%)、「薬物療法の計画」「２次救急患者のマネジメント」「内分泌、代謝疾患をもつ患者のマネジメント」「感染症をもつ患者のマネジメント」がいずれも24名(60%)が続いた。

　9つのカテゴリー毎に研修を希望する者の割合を算出した。最も希望者が多かったカテゴリーは「アセスメント：大項目3個」58%であり、次いで「病態機能学：大項目2個」51%、「臨床薬理学：大項目6個」43%、「マネジメント：大項目28個」41%、「疾病予防：大項目4個」24%、「医療倫理：大項目1個」18%、「NP論：大項目5個」16%、「ＮＰ実践に関連する法令：大項目16個」15%、「医療安全：大項目1個」15%の順であった。

３．研修の形式に関するニーズ

１）研修期間

「臨床薬理学講座」に関する研修内容は、16カテゴリーが含まれるものであり、研修を4日間に分割して実施した。具体的には、2日連続の研修を2回行い、1回目と2回目の研修を1か月あけて実施した。研修期間に関しては、今回の方法が良いと答えた受講者は34名（85.0%）であり最も多かった。2回に分けず4日間連続が良いと答えた受講者は5名(12.5%)、2か月間をあけた方が良いと答えた受講者は1名(2.5%)であった。

２）研修の時期

研修の時期（開催日）日については、土日曜日が良い20名(50.0%)、土曜日のみが良い9名(22.5%)、日曜日のみが良い3名(7.5%)、平日のみが良いと答えた受講者は8名(20%)であった。

３）年間の研修参加可能回数

年間の研修への参加可能回数については、年1回9名(22.5%)、年2回22名(55.0%)、年3回6名(15.0%)、年4回2名(5.0%)、年5回1名(2.5%)であった。

４．研修参加への支援

１）経済的支援

研修に係る参加費については、自己負担30名(75%)、施設からの補助あり10名(25%)であった。旅費については参加費同様、自己負担30名(75%)、施設からの補助あり10名(25%)であった。

２）研修日の勤務の扱い

研修に参加した日の勤務の取り扱いについては、年休扱い31名(77.5%)、出張扱い9名(22.5%)であった。出張扱いの受講者のうち5名は年休振替を別の日に受けており4名は年休の振替がなかった。

1. **考察**

１．養成事業修了看護師のニーズからみた卒後研修

１）養成課程修了後1年目と2年目における研修

　修了後1・2年目併せて、希望の多かった研修内容は「医師による超音波、X線等の画像診断に関する知識と技術」であった。養成事業修了看護師として活動する修了生は、患者の症状から医師による診断を予測する中で、養成課程修了時点では医師による超音波・X線等の画像診断に関する基本的な知識・技術が不足していると認識し、臨床現場での研修を希望している。この結果は、修了生を対象として定期的に開催している情報交換会でのカリキュラムに対する意見とも合致している（石川,2012）。これは大学院教育では、患者の症状から医師による診断を予測する能力を身につけるために、フィジカルアセスメントや臨床推論に力点を置き、画像の基本的な読み方、正常・異常の区別などが実践的に活用できる知識・技術として身についていないことが考えられる。医師による画像診断に関する研修内容は養成事業修了看護師として活動していくには不可欠な知識・技術であり、早急に解決することが望まれる。そのためには修了後1年目に研修を実施し、研修の中で修了生が困難と感じた症例の画像を用いて課題解決できるように実践的に画像評価の演習を行っていく、もしくは放射線科(画像読影室)での研修を行うことを考えていく必要がある。さらに大学院教育では超音波・X線に関連する画像の基本的な読み方、正常と異常の区別などは講義・演習でさらに強化していく必要がある。

　修了後2年目においては、「頻度の高い症状における医師による診断から治療までの系統的な知識」が最も多く、また1年目に比して「救急医療・集中医療・周手術期医療に関連した新しい治療法やケアに関する知識と技術」の希望が多い。修了後3年目の研修希望では、自分が専門とする領域の知識・技術の強化のための研修、最新の医療情報や治療の進め方、ガイドラインなどがあがっていた。このことから2年目以降の研修では、クリティカル領域で頻度の高い症状における医師による診断から治療までの最新医療を研修内容とすることが養成事業修了看護師の質の担保と向上につながると考える。また研修方法については、「自分の能力を強化できる診療科で研修を行う」などの希望が多いことから、より実践的な研修方法として受け持ち患者を持つ研修展開を考えていきたい。

　卒後研修について、実際に医療施設の中で養成事業修了看護師を指導している医師たちからは、施設間で指導にばらつきがあること、1年目の研修（OJT）終了後も研修を続けていく必要があることを指摘されていることから、全国の施設で働く養成事業修了看護師の能力を一定レベルに担保するための研修システムを構築することを求められている（石川,2013：島田,2013）。そのため修了生からのニーズおよび指導医師の意見等を参考に、生涯学習を視野に入れた養成事業修了看護師の臨床実践能力の質の担保と向上ができる研修プログラムを作成する必要がある。

２．「薬剤投与関連」に関する知識の理解度を高めるために

「臨床薬理学講座」研修は16のカテゴリーから構成されているが、抗菌薬や肺炎などの

感染症に対する薬剤、循環器系疾患領域の抗凝固療法や高血圧に関する薬剤につての理解度が低かった。「疼痛」、「糖尿病」、「心不全・不整脈」に関連した薬剤に関しては理解の程度は高かったが、有用性、満足度の評価はともに低かった。

「疼痛」、「糖尿病」、「心不全・不整脈」については、プライマリー・慢性領域のみならず、クリティカル領域においても多くの患者に処方される事例も多く、重要な「薬剤投与関連」の知識であるといえる。

今回は、オムニバス形式で、16カテゴリーの研修内容を複数の講師が担当しており、有用性、満足度には各講師のプレゼンテーションの方法や、研修の際に配布された講義資料、使われた教材に対する評価が関連していることも否定できない。今回の研修は、すべて講義形式で行われたが、事例等を対象にしたケースメソッド方式や参加型教育プログラムといった、受講者が能動的に参加できる研修形式を検討し、受講者のニーズに合った内容と研修方法をさらに検討していくことが重要と言える（橘,2007：池田,2005）。

３．医行為実施に必要な知識や技術獲得のための研修（off-JT）  
　「アセスメント」、「病態機能学」、「臨床薬理学」、「マネジメント」に関する研修のニーズが希望率40%以上と高く、臨床推論や処置に必要とされる医学的な知識・技術に関する研修ニーズが高かった。矢崎(2012)は、これから求められる看護職の能力として、患者の病態を医学的な視点から的確にとらえて判断する高度な診察能力が必要であると述べており、これを習得するための研修ニーズが高いことが明らかになった。

また、今回の卒後研修の一環として、「臨床看護学講座」に関する研修を計画し、その研修の受講直後の調査にもかかわらず、今後も「臨床薬理学」に関する研修ニーズは依然と高かった。1回限りの研修ではなく、同じテーマの研修を繰り返し行い、研修をシリーズ化していくことも必要であると思われる。また、研修方法も工夫するなどの必要がある（藤内，2012）。単なる集合教育ではなく、ケースメソッドを取り入れた演習形式の研修方法が妥当と考える。

一方、「疾病予防」、「医療倫理」、「NP論」、「ＮＰ実践に関連する法令」、「医療安全」についてのニーズは、上述の4つのカテゴリーと比較し、希望率が30%未満でありニーズとしては低かった。今回の調査対象は、23年度の「特定看護師（仮称）養成　調査試行事業」及び24年度の「看護師特定能力養成調査試行事業」の指定を受けた養成課程の修了者（2年課程）であり、最低5年以上の看護師としての臨床経験を有するものであった。研修ニーズの低かった内容は、看護師として従事している時代から研修を受ける機会もあり、日々の業務を遂行する上で特に必要とされる医学的な知識を習得できる研修を優先して企画してほしいという意向が反映したものと考える。しかし、研修ニーズが低かったカテゴリー「ＮＰ実践に関連する法令」の大項目に含まれる「感染症対策」については16名（40%）が失語研修を希望しており、基準や判断、ガイドラインの背景となっている法的根拠についても関心が高いことが明らかになった。今後は、各医行為に関連した医学的な知識と、それに関連した「法令」、「医療安全」、「医療倫理」についても同じ研修で扱うなどの研修内容の組み方にも工夫も必要である。

４．研修の形式に関するニーズと研修参加への支援のあり方

　今回の調査対象は、23年度「特定看護師（仮称）養成　調査試行事業」及び24年度の「看護師特定能力養成　調査試行事業」の指定を受けた養成課程の修了者で、課程修了後1年目と2年目にある者であった。調査時点で、OJTによる卒後研修中の者もおり、平日の研修参加が困難なために研修の開催日として土・日曜日を歓迎した者が多かったと考えられる。また、今回の「臨床薬理学講座」は16のカテゴリーから構成されており4日間にも及ぶ研修であり、連続した研修の場合には業務に支障をきたす場合が考えられ、2日ずつ2回に分けた研修が、受講者のニーズに合致していたものと思われる。この場合には、1か月程度の期間をあけた研修間隔が出席しやすいと判断されたものと思う。このように、研修日数が数日に及ぶシリーズ化した研修プログラムについては、1か月程度の期間を空けて土・日曜日に開催するスケジュールが相互研修のスタイルとしては好ましいと考えられる。

　年間の研修希望回数は2回と回答したものが最も多かった。今回の受講者は日本全国から参加しており、研修参加費や旅費の捻出も必要となることから、半年に1回程度の研修が経済的な面からも参加しやすいと思われる。今後は、卒後研修の対象者のニーズの高い異なる2つのテーマの研修を用意することや、同じ研修を時期と開催地を変えて計画するなどの工夫が必要と考える。

　今回の臨床薬理学講座への参加については、施設によっては出張扱いとし、土日の休日を別の日に振り分ける措置をとってもらっている場合もあった。対象者は、自身の専門性のさらなる強化などを図るために、医学系の学会参加や医学書などの購入などの経済的負担も問題となっている。このことからも、施設からの経済的な支援や研修のための勤務の調整といった配慮が急務であるとの声もあがっている（塩月,2012）。

1. **結論**

１．医療施設においてクリティカル領域で働く養成事業修了看護師で同意の得られた20名に卒後研修に関するニーズを養成課程修了後6か月経過時点で調査した結果、以下の結論を得た。

１）卒後研修の開始時期としては、養成課程修了後1年目の10～12月を希望した者が11名(55%)であった。

２）卒後研修の頻度としては1年に1回の開催希望が11名(55%)であった。

３）修了後1年目に希望する研修内容で最も希望の多かったものは「医師による超音波、X線等の画像診断に関する知識と技術」で52点、次に多かったのは「頻度の高い症状における医師による診断から治療までの系統的な知識」で48点であった。修了後２年目に希望する研修内容で最も希望の多かった研修内容は「頻度の高い症状における医師による診断から治療までの系統的な知識」で38点、次に多かったのは「医師による超音波、X線等の画像診断に関する知識と技術」で36点であった。研修方法は、修了後1・2年目ともに「自分の能力を強化できる診療科で研修を行う」を「必ず行ってほしい」と希望した者が多かった。

４）修了後1年目では「決められたプログラムでよい」で、2年目では「選択できる複数の個別プログラムを組んでほしい」という希望が多かった。

２．23年度及び24年度の「看護師特定能力養成調査試行事業」の指定を受けた養成課程の修了者を対象とし、①研修会開催に対するニーズの高い「臨床薬理学講座」の研修（off-JT）を企画・開催し、受講者の研修に対する評価を調査すること、および、②今後開催を希望する研修（off-JT）に関するニーズ調査を行った結果、以下の結論を得た。

１）．受講者から得た「臨床薬理学講座」研修に関する評価は、研修は有用であり満足したとの結果であったが、抗菌薬や肺炎などの感染症に用いられる薬剤、循環器系疾患領域の抗凝固療法や高血圧に関する薬剤についての理解が困難であるとの結果であった。

２）．今後開催を希望する研修（off-JT）としては、「アセスメント、「病態機能学」、「臨床薬理学」、「マネジメント」に関する研修ニーズが高く、一方、「疾病予防」、「医療倫理」、「NP論」、「ＮＰ実践に関連する法令」、「医療安全」についての研修ニーズは低かった。

３）．研修の形式としては、土・日曜日開催を希望しており、シリーズ化した複数回に及ぶ研修は1か月程度の間隔を空けて数回に分けて研修日を設けることを希望していた。また、年間2つ程度のテーマを取り上げて研修を実施することを希望していた。研修参加に係る費用は自己負担が多く、一部の受講者は出張扱いで週休振替の措置を受けていた。

1. **研究発表**

１. 論文発表

　なし

２. 学会発表

　平成26年度国立病院総合医学会学術集会および国立病院看護研究学会で発表予定

引用・参考文献

・池田優子（2005）：中堅看護師に対する主体参加型教育プログラムの効果，日本看護学会論文集看護管理，35号，274-276

・石川倫子（2012）：修了生の活動を支える情報交換会，厚生福祉，第5950号，2－4

・石川倫子（2013）：修了生の働いている現場を訪問して，厚生福祉，第5959号，2－5

・草間朋子：チーム医療を推進するために，保健の科学，55(2),76-77

・塩月成則：新しい医療の選択肢としての認証看護師音役割と責任，看護管理，22(4),317-319

・島田 敦，磯部　陽，大石　崇，他（2013）：クリティカル領域の特定看護師（仮称及び

・橘とも子, 橘 秀昭（2007）：ケースメソッドを用いた研修プログラムの健康危機管理コンピテンシー獲得効果に関するパイロット研究，昭和医学会雑誌，67巻5号，422-434

・日本NP協議会（2013）,ＮＰ資格認定試験の出題科目,http://www.jnpa.jp,[検索日2014.2.18]